

飲んだ薬の成分は血液によって全身をめぐる

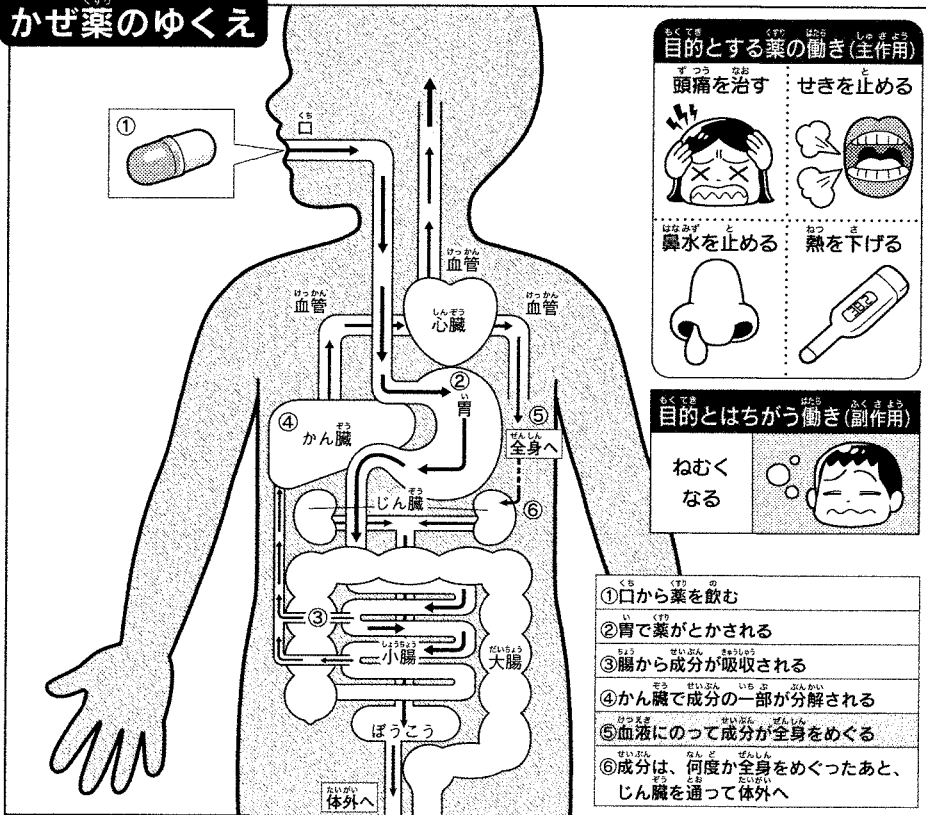
指導 一般社団法人 日本くすり教育研究所 代表理事 加藤 哲太 先生

薬には、飲み薬や塗り薬、注射など、どのように効かせたいかによって、さまざまな種類のものがあります。このうち、かぜや頭痛、腹痛などのときによく使われるのが、飲み薬です。

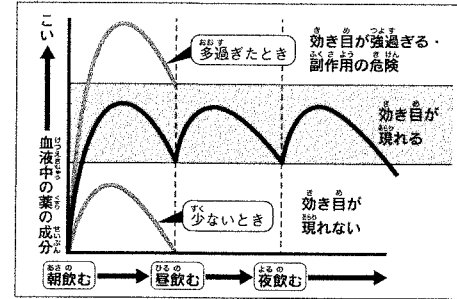
口から入った飲み薬の成分は、主に腸で吸収されてかん臓に運ばれてから、血液によって全身をめぐる。そして、薬を効かせたい場所で働きますが、このとき薬の成分は効かせたい場所以外にも届くため、もとの目的とはちがう働き（副作用）をすることがあります。

効かせたい場所で薬をしっかり効かせ、また、副作用を起こりにくくするためには、薬の箱やふくろに書かれている薬の使い方を守ることが大切です。

かぜ薬のゆくえ



飲み薬を飲むときのきまり

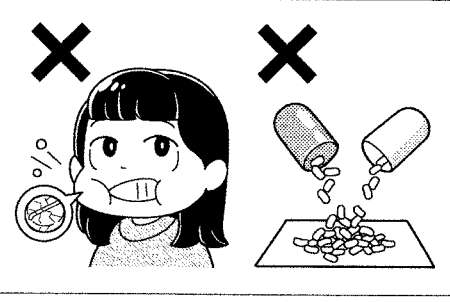


飲む時間や量を守る

薬の効き方は、血液の中の薬の成分のことで決まります。飲む時間や薬の量は、ちょうどよい薬の量が保たれて、しっかりと効くように決められているので、勝手に量を増やしたり減らしたりしてはいけません。

水かぬるま湯で飲む

いっしょに飲む飲み物の種類によっては、薬の成分にえきょうをあたえて効きにくくしたり、成分を変化させたりすることなどがあります。薬は、必ずコップ1ばいの水かぬるま湯で飲みましょう。



じょうざいをかんだり、カプセルの中身だけを飲んだりしない

薬は、効かせたい場所でしっかりと効くように、ひとつひとつの形や使い方を考えて作られています。じょうざいをかんだり、カプセルを開けて飲んだりすると、そのくふうが生かされず、効果が得られません。

副作用に注意しよう

薬を飲んだ後は、体にいろいろな変化が現れます。どんな変化があったかがいちはんよくわかるのは本人です。「おかしい」と感じるなどがあれば、すぐにおうちの人などの大人に伝えましょう。

よくある副作用

ねむくなる、おなかが痛くなる、頭が痛くなる、息が苦しくなる、じんましんが出る、など

